

戦後木造モダニズム建築としての八幡浜市立日土小学校の保存と持続的活用

正会員 曲 田 清 維 君
正会員 花 田 佳 明 君
正会員 和 田 耕 一 君
正会員 武 智 和 臣 君
正会員 腰 原 幹 雄 君
梶 本 教 仁 殿

八幡浜市立日土小学校は、市の職員として勤務していた建築家松村正恒の設計により、戦後まもなくの 1956 年に中校舎が、2 年後に東校舎が竣工、以来半世紀が経過した今も「使い継ぐ保存活動」によって生かされている。この活動の特筆すべき点は以下の通りである。

第一は、行政・父兄を調整した学校ならではの保存活動である。保存運動は 1997 年に本会四国支部が開催したフォーラム「子供と学校建築」を起点とし、モダニズム建築見直しの機運と相俟って 1999 年に「ドコモモ 20 選」の一つに選ばれ、その価値が地元でも再認識された。その後、台風による一部破損もあり父兄から建替え案が浮上、シンポジウムの開催や具体的保存計画の提示などでこの危機を回避し、2009 年になって保存再生を果たした。文化財的価値を損うことなく保存・修復し、同時に最新の小学校としての機能の充足と安全・安心も満足させることで、10 年の歳月をかけた使い継ぐ保存活動を成就させている。

第二は、戦後木造モダニズム建築としての保存価値である。戦後の新しい教育の場作りの先駆的試みとして、光庭を介した教室と廊下の独立性、小割横連窓の透明感と水平線の強調など平面立面にバウハウスの影響を色濃く漂わせながら、ハイブリッド木構造の小屋組に萌黄色のスレート瓦を葺いた緩勾配の切妻屋根として、欧風の建築思想と日本の風土の知恵を融合している。戦前・戦後の木造の系譜に類を見ない、独自のモダニズムの世界を展開する革新性は、1950 年代の建築文化を示す貴重な価値として未来に伝えられている。

第三は、保存における再現の手法である。特徴的な丸鋼ブレースを 1 階だけ二重化して補強、廊下壁の合板張り塗装は来歴を検証した上で萌黄色に復元、中校舎の内倒し窓は欧風の「ホッパー窓」を彷彿とさせるなど、オリジナルの工法・設計思想に遡って手作りで復元し、子供たちの目線に合わせたスケール感、パステル調の色彩、理詰めのディテールを一つ一つ丹念に再現することで、独特のニュートラルな空気感の再生に成功している。

第四は、受け継がれる理念である。図書室や旧補導室の和の感性、緩やかな階段などの居場所作り、更にはベランダや外部階段を各所で溪流の上空に張り出し、谷側の時空を共有する試みも悉く忠実に再現されている。中でも清流に密接する配置は、棚田の生産や景観、谷間の生態系を学ぶ林間学校のように自然と交歓しつつ永く使い継がれることを願い、谷あいもまた水清く山蒼く手入れされつつ継承され両者は共生を育んできたのである。生活空間の多様性と環境融合の理念の追求は、増築された普通教室棟（新西校舎）にも受け

継がれ、谷筋に視覚的に開かれた新設階段もまた子供たちの人気の場所となっている。

第五は、地域社会への持続的な波及効果である。ここには終戦直後の地方都市を近代化しようとするモダニズム運動の精神とその証しが、自然の中の慎ましくも理知的な情操教育の場として、今も色褪せぬ革新性を体現し使い継がれている。日土小学校で過ごす 6 年間に、子供たちは心と体で自己形成に覚醒し、親、子、孫へと続くその共感は、「使い継ぐ保存活動」への地域住民の総意となり、コミュニティを支える精神的拠り所となっている。

以上のように、八幡浜市立日土小学校の保存と持続的活用は、その保存活動、価値、手法、理念、波及効果において格段に優れているうえに、社会的意義を更に大ならしめるものとして、戦後木造モダニズム建築初の保存再生のメルクマールであること、また、「環境とともに継承する」という今日的な視点を新たに提起するものであることは高く評価できる。

よって、ここに日本建築学会賞を贈るものである。